

ほんとの空に戻る日まで

—人とふるさとをつなぐ—

FURE
うつくしまふくしま未来支援センター

国立大学法人
福島大学

共生活



VOL.4



子どもたちにはいつも 笑っていてほしい



シンガーソングライター

堀下 さゆりさん

対談

うつくしまふくしま未来支援センター長

中田 スウラ

中田 堀下さんには、子どもたちにたくさん歌を作っていただいてありがとうございます。子どもたちが元気になるということは親御さんを含めて福島県民みんなが元気になる原動力となりますから、とても感謝申し上げます。

堀下 とてもないです。中田 子どもたちがプロの方に作っていただいた曲を歌うチャンスに恵まれ、その歌が震災直後のたくさんの方々の心にエネルギーと活力を与えてくれたというのは、とてもうれ

しいことです。その当時のことも含めて活動をされるに至った経緯をお聞かせください。

堀下 私はデビューしてからはずっと東京を活動の拠点にしていますが、ちょうど震災の3カ月前に父親が亡くなりまして、東京と相馬を往復することがすごく増えたんです。震災に遭ったのは、その3日前に東京でのライブを終え相馬に戻っていた時でした。

中田 その翌日にはもう原発震災が明確になり、水素爆発も起こり、どのご家族もいろいろな心配をしながら避難していききましたよね。

うつくしまふくしま未来支援センターが主催する「同窓会事業」のテーマ曲「この街に咲く花のように」の作者・堀下さゆりさんは、出身地相馬市で東日本大震災・原発事故に遭遇しました。一時は音楽にも気が入らなくなってしまうそうですが、何かやれることをと動き始めたボランティア活動での出会いから、音楽を取り戻していきます。22校1307人の子どもたちと一緒に作ったアルバム「スマイル…」の経緯を中心に、「ふくしま」の子どもたちへの思いを語り合いました。



profile 堀下 さゆり ほりしたさゆり

福島県相馬市出身のシンガーソングライター。平成17年メジャーデビューアルバムに収録の「カゼノオロミチ」はNHKみんなのうたでも放送され反響を呼ぶ。その後全国でのライブ活動やCDリリース、ラジオDJや楽曲提供など幅広く活躍。震災後は地元福島に寄り添いながら復興支援活動を続けると共に、マイペースに自然体の音楽を全国へ発信している。

被災地域の復興支援を これからも支えていくために

東日本大震災と福島第一原発事故から丸4年が過ぎましたが、今なお12万人弱の福島県民が県内外に避難生活を余儀なくされています。

双葉郡を中心とした被災地域では、昨年9月に国道6号線の避難区域内開通、今年3月には常磐自動車道の全線開通により基幹交通網がようやく整備され、そして大熊町と双葉町による中間貯蔵施設の受入れ容認により、福島の復興が大きく前進したといえるでしょう。しかし一方で、福島第一原発施設内では増え続ける汚染水、高線量で廃炉作業未着手エリアがあるなど、原発事故は収束していない状況にあります。また、仮設住宅などでの避難生活も5年目に入り、避難生活の長期化による健康問題、生活不安も継続しています。

このような状況に対して、福島大学、とりわけ「うつくしまふくしま未来支援センター(FURE)」の支援活動は、着実に成果を積み重ねてきています。特に、福島県産の農林業・水産業、観光産業への風評被害が続く中で、農・環境復興支援部門による農産物の風評被害対策への取り組みや、学生サポーター組織(FURE's)による教育旅行用パンフレット『フレフレ!!はつたび!!』作成は、若者目線での風評被害対策への素晴らしい成果といえるでしょう。また、こども・若者支援部門の同窓会事業や相談室の活動、地域復興支援部門スタッフによる大熊町、双葉町の復興計画の取りまとめは、この1年の特筆すべき活動といえます。

5年目となる今年は、FUREの支援活動事業のまとめと新たな飛躍の年でもあります。福島大学は、被災地域の復興を担える人材育成と被災者・被災地域に寄り添った支援活動を一層進め、FUREは、その拠点組織として、さらなる発展をめざします。

福島大学長 中井 勝己



C O N T E N T S

- 03 対談『子どもたちにはいつも笑っていてほしい』
うつくしまふくしま未来支援センター長 中田 スウラ
シンガーソングライター 堀下 さゆり
- 08 うつくしまふくしま未来支援センターの紹介
- 10 うつくしまふくしま未来支援センターの1年のうごき
- 12 これまでのFURE これからのFURE
うつくしまふくしま未来支援センター 副センター長
小山 良太 (食・農復興支援担当マネージャー、経済経営学類 教授)
- 14 こども・若者支援部門
こども・若者支援部門長
こども支援担当マネージャー
森 知高 (人間発達文化学類 特任教授)
こども支援担当／若者キャリア支援担当
- 18 地域復興支援部門
地域復興支援部門長
初澤 敏生 (人間発達文化学類 教授)
地域復興支援担当／歴史資料保全支援担当／
産業・街づくり担当／防災支援担当
- 24 農・環境復興支援部門
農・環境復興支援部門長
塚田 祥文 (環境放射能研究所 教授)
食・農復興支援担当／放射能汚染対策担当
- 28 企画・コーディネート担当
- 29 いわき・双葉地域支援サテライト
- 30 学生サポーター組織 FURE's
- 31 ふくしまスマートシティ・プロジェクトの活動概要
科学研究費補助金基盤研究(S)
『東日本大震災を契機とした震災復興学の確立』
- 32 うつくしまふくしま未来支援センター員一覧
- 33 うつくしまふくしま未来支援センター フロアガイド
- 34 トピックス

※部門・担当・役職については、平成27年3月時のもので表記しています。

堀下 はい。まずは郡山に避難しましたが、母が家が心配なので戻りたいと言いましたので、3月下旬ごろには戻ってきました。

実は、音楽をずっと信じてやってきましたが、父親が亡くなったときに音楽は聴きたくないという気持ちになってしまっ、ピアノを弾いたりしたくなくなっていました。それが、百箇日を過ぎてようやくというところに震災で、また音楽どころじゃないと。音楽よりも安全に寝られる場所とか、水とか食糧とか燃料とか、そういったことで頭がいっぱいでした。そのためにか、自分は健康で動けるからやれることをやろうと思ひ、避難所の炊き出しや救援物資運びなどを少しやらせていただきました。

何かすることでも自分も気持ちに楽になるというか、とりあえず物資を運ぶだけでも力になれると思ひ、何日か通っていたのですが、そんな中で市役所の方から「そうまいがいFM」が立ち上がるからと声をかけていただき、お手伝いすることになりました。

FM局は市役所3階の防災無線室で、最初は生活情報や安否情報を流しました。でもそれだけではちよつと息が詰まるので、音楽を流そうということになっ



て、選曲のため久しぶりに音楽を聴いたんです。当時はやはり童謡を選ぶことが多かったのですが、避難所のお年寄りが聴きたいかなと思ひ、昭和歌謡も流しました。

また、中村神社にお馬さんと触れあえる場所が設けられていて、そこに自由にコメントを書けるノートが置いてあるんですが、そのコメントをラジオで読んだりも

していました。その中に「子どもが避難所で泣きやまないの、子どもたちが笑顔になれる音楽を流して」という要望があつて、そこからひたすら子ども向けの音楽を流すようになったんです。当時はやっていた「マル・マル・モリ・モリ」とか、手探りで流す中から、子どもたちが笑顔になれる何かがあつたらいいなという思ひが芽生えてきた感じでした。

がんばって小さくなっていた子どもたち

中田 当時の福島大学は、建物に大きな被害はなく、授業も終わっていて多くの学生はもう帰省をしていたので学生対応は少なくて済みました。けれどもそこに原発震災が起り、浜通りの方々がほとんど避難を開始され、大学にも避難者の方が徐々にみえになるようになりました。浜通りからようやく福島市にたどり着いた避難者は、どこに避難所が開設されるかという情報も十分にはない中、大学の門を叩いてくださったわけです。

通常、国立大学が避難所になることはないのですが、急ぎよ大学の体育館に避難所を設けました。災害関係が専門の先生もいらつしやつたので、運営の仕方教えていただきながら、学生と教職員が一緒になって受け入れをしていきました。

堀下 避難者の方々は助かったでしょうね。

中田 大学には生協の食堂があり、家庭科の調理実習室もありましたから、農協さん等にお願ひしながら食材を集めて温かいスープを作り、皆さんに配りました。また、学生が子どもたちが過ごせる場所がないことを心



配して、避難所となった体育館の中に子どもスペースを作りました。みんなで遊べるような玩具や絵本を置いたり、時には一緒に鯉のぼりを作ったり。

堀下 それは素晴らしい。

中田 そうした活動をするうちに、当時、社会の中に子どもたちの笑い声がすくなくなくなっていることに気づき、子どもたちのための活動の場を郡山市や福島市の避難所、学校の避難所などに広げていきました。避難所に入つてみて驚いたのは、子どもたちのスペースが全くないことでした。そこで長い机を借りて廊下に子どもたちの場所



始められたのですね。

堀下 そうですね。あれは4月20日かそのころから、子どもたちを前に歌い始めました。原発事故の直後でみんなマスクをしてましたよね。でも、だんだん歌っているうちにマスクを取つて、少しずつ声が大きくなっていったのが印象的でした。そのころは避難所や仮設住宅ではのびのび大声を出せるようなスペースはなかなか無くて、かと

いつて外でのびのび遊ぶこともできなかった。春から夏に向かつていく一番良い季節に、心を解放する場所も遊べる場所も本当になかったんです。

ラジオでも、子ども向けの歌をずっと流していましたが、私の子ども向けの持ち歌は、NHK「みんなのうた」でやらせていただいた1曲ぐらいしかなくて、もっと子どもたちが喜んでくれる持ち歌があれば良かったの

につて本当に思いました。そしてふと、カバー曲でもいいから子どもたちと一緒に何曲か歌つて、CDアルバムを作つたら楽しいんじゃないかって思つたんですね。それで、最初は有名な曲やNHK「みんなのうた」の曲を歌おうと思ったのですが、なかなか許可が得られない。「じゃあ作るか!」と、子どもたちが楽しんで歌つてくれそうな曲を自分で作ろうと決めました。

を確保し、学生が子どもたちと一緒に宿題をしたり、折り紙をしたりしながら、少しでも子どもらしい時間を取り戻そうと活動を進めていきました。

子どもたちの教育や育ちの問題というのはなかなか日が当たらないところでもあるんです。というのは、子どもたちは大人たちが困っているということは分かりますので、みんな頑張っている。小さな心を奮い立たせながら、親を気遣いながら、おじいちゃん、おばあちゃんを気遣いながら生活している。だからなかなか見えないのです。こういう子どもたちが、子どもらしい時間と生活を取り戻していくことが、将来への育ちにおいてとても大切だと思います。

堀下 さんも、ちょうどそんな時に、子どもたちに歌声を届け



そんな中、当時の日立木小学校の星和彦校長先生が「ぜひ、やりましょう」と言ってくださつて、そこから受けてくださる学校がどんどん増えました。ご縁がご縁をつないでくれて、幼稚園から小・中・高校まで、本当にたくさんさんの学校が参加してくれました。あの夏はずうつと、どこかの学校に通つてましたね。

中田 子どもたちが徐々に声を大きくしてみんな歌つていく。そのハーモニーというのは、人との関係をつなぎ直して、一緒

に生活する仲間をあらためて実感していくステップにも思えますね。心と体を伸びやかにしていく大事なきっかけを、堀下さんの歌がつくつてくださったような気がします。

**歌は人の声を聴かないと
気持ちよく歌えない**

堀下 レコーディングをしていく中で、本当にいろいろなことがありました。海のそばの磯部中学校は、卒業式の後に津波が来て親御さんが子どもたちと一緒に被害に遭うなど悲しいことがあつたのですが、「卒業」という曲を歌いたいと言つてくれました。練習に2回ほど通つたのですけど、男子は恥ずかしかったのか、あまり声が出ていなかっ





母さんもいれば、少しずつ解放されているお母さんもいる。地域による違いが大きくなってきた感じがするんです。

堀下 そうですね。それも感じますね。

中田 そこを、課題がある地域は特別だというような見方になってしまわないようにと、心配しています。課題を多く抱える地域も含めて「ふくしま」全体の今の状況を確認しながら、県民として、住民として、安心して暮らしていく地域を作っていくために何をしなければいけないのかを、考えていかなければと思うのです。

堀下 そうですね。

中田 地域の将来を支える担い手になってくれるのは、今の子どもたちです。今この時のいろんな経験をして、その現実と課題を共有しながら生きていくと



いう覚悟を持った子どもや青年が将来を担っていく、そういう社会が「ふくしま」には必要ではないかと思っています。そこに向けてエールを送り続けている堀下さんの歌というのは、本当にありがたいものだと思います。

「だれもひとりぼっちにさせないよ」

中田 今後の「ふくしま」や、福島大学、未来支援センターに期待することがあれば、宿題として残していただければありがたいのですが。

堀下 そうですね、地域と共に歩んでくださっている未来支援センターの皆さんだと思いますので、これからも県民一人ひとりの意見に耳を傾けてくださるとうれしいです。

先日、相馬市立飯豊小学校の子どもたちと一緒に曲を作ったのですが、彼らが「だれもひとりにさせないよ」という歌詞を書いて、彼らは本当にそう思っていました。張っているんだなと思いました。ほんとうに誰も独りぼっちにならない社会を、「ふくしま」から創れたらいいなと思います。仮設にいらっしゃる方、復興住宅に入った方、自宅に戻られて

たんです。ところがレコーディングの日になったら、すごく練習できてくれて、最初の時には全く声が違っていて！あの時は感動しましたね。

中田 「卒業」の歌を聴くたびに、今でも涙腺が緩くなってしまうます。当時のこと、どうしてもいろんな思いがあふれてしまうのですが、同じような気持ちを持った子どもたち、親御さんたちがたくさんいらしたと思います。

堀下 バレー部の子たちが歌ってくれた「青春の日々」という曲は、「上手に歌おう」ではなく自分たちなりの声で青春時代を謳歌してほしいという思いから「歌いたいように自由にありのまま歌って」と伝えました。

「歌」って本来みんなで歌うと楽しいものだし、先ほどハーモニイとおっしゃいましたけれど、歌は人の声を聴かないと上手に



いる方、本当にいろんな方がいると思うのですが、そのいろんな声を聞いて、これからも、子どもたちのためにたくさん楽しい場を作ってください。お手伝いできることがあれば何でもやらせてください。

中田 ありがとうございます。一人ひとりの声を大事にして、復興活動をきちんと進めるようにという強いエールをいただいたと思います。私たち「うつくしまふくしま未来支援センター」も活動すべきことはまだまだたくさんあるのだとしつかりと心に刻みたいと思います。ぜひ、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

堀下 こちらこそよろしくお願いいいたします。

中田 今日はお時間をいただき、本当にありがとうございました。



気持ちよく歌えないんです。きっと、彼女たちはそれを感じてくれたんじゃないかと思っています。それぞれがちゃんと分かって毎日歩んでいるんだなと、すごく感じました。

中田 家族がばらばらになつて、故郷も失いかけています。それでも一人ひとりが、何とか頑張らなくてはいけないと必死に自分を奮い立たせている中で、人のぬくもりを感じ始められるきっかけとして歌はすごく大切だと思います。

歌は人と声を合わせていくことで広がっていく。歌うことで人がそばにいることを再認識し、大事な仲間とのつながりや人と一緒に暮らしていくんだという実感を持ち始められる。そういう意味でも、堀下さんの活動は子どもたちに大きな安心感やエ

ネルギーを与えてくれたのではないかと思います。

堀下 何ができたかは分からないのですが、一つのをみんなで作ったという思い出はきっと子どもたちの中にも残ってくれたかなと思うと、それはとてもうれしいですね。「CDになるんだよ。全国にも並ぶんだからね」と言うときみんな「ええっ！」とか言ってるすごく嬉しそうで、その笑顔で私も頑張れたという気がします。

中田 うつくしまふくしま未来支援センター内に「FURE's (フレツ)」という学生組織があります。ボランティアに参加しながら、センターの専門スタッフと現地の視察に行ったり、その支援活動に参加したりする中で、学生自身が住民の生の声を聴いて何を考えていかなければならないのかを考え、問題を解決するプロジェクトを自分たちで作る。それを地域の方々と行いながら地域を復興させていく、そういう組織です。

その活動の中で住民のお話を伺っていると、子どもたちが徐々に子どもらしい夢や希望を語り始めていくということが実感でき、喜びを感じる一方、地域の不安や悩みがまだまだ混在しているとも感じています。4年が経ちましたけれども、地域によって様々な悩みを持たれているお



こども・若者支援部門

こども支援担当

被災した子どもたちの心理・社会的ダメージを調査・分析し、学校及び教育行政機関と連携しながら、ダメージを克服し、自立していく方を講じます。活動に当たっては、必要に応じて家庭や学校等への支援を行います。

若者キャリア支援担当

被災した若者の心理・社会的な状況の状況と進路形成に関する側面の実態調査を行います。その結果分析とともに、地域の産業や教育の条件整備にかかる提言や、若者の雇用をはじめとする自立に向けた支援活動とその方を講じます。

地域復興支援部門

地域復興支援担当

被災地自治体の復興・復興ビジョンの作成を支援します。崩壊したコミュニティ再生への方を練り、実践的支援を行います。また、被災地にある大学として、支援活動のニーズを掘り起こし、被災者の生活とその再生への支援をNPO法人や司法機関・福祉団体などと連携を行います。

歴史資料保全支援担当

福島県内の歴史・自然史資料の被災状況を把握するため、各自治体への調査を実施。実態と課題を把握し、歴史的資料等の保管・整備計画を策定し、実施します。

産業・街づくり支援担当

震災と原発事故によって大きな打撃を受けた福島県の地域産業の復興・復興支援を総合的にを行います。自治体等と協力しながら、被災地域の都市計画・交通計画・街づくりに関する支援を行います。福島県が有する再生可能エネルギーを有効活用するための技術的・政策的検討に関する支援を行います。

防災支援担当

震災の実態を記録し、そこから得られる教訓を整理するとともに、県内で起こり得る自然災害による被害の最小化方を検討し提言します。

農・環境復興支援部門

食・農復興支援担当

土壌分析・成分分析に基づく汚染状況の把握と、それを前提とした農業経営、街づくりを各自治体、産業界と連携しながら短期・中長期的対策を協同で実施します。

放射能汚染対策担当

土壌・水から農作物への放射性物質の移行過程、大気中放射性物質の経時変化に関する調査・研究や汚染された環境復旧を目指す方法の検証等を進めます。

サテライト（川内村・南相馬市）

現地と大学を繋ぐ拠点として、地域の復興・帰還に向けた街づくりサポートや、放射線対策サポート、住民との交流などの地域に密着した活動を行います。

学生サポーター組織「FURE's」

関心のある分野の特任教員の下で、調査等を行いながら、福島の現状を学び、実践的な支援活動を行うほか、FURE's独自の取り組みとして事業を企画し実施します。



福島大学 うつくしまふくしま 未来支援センター

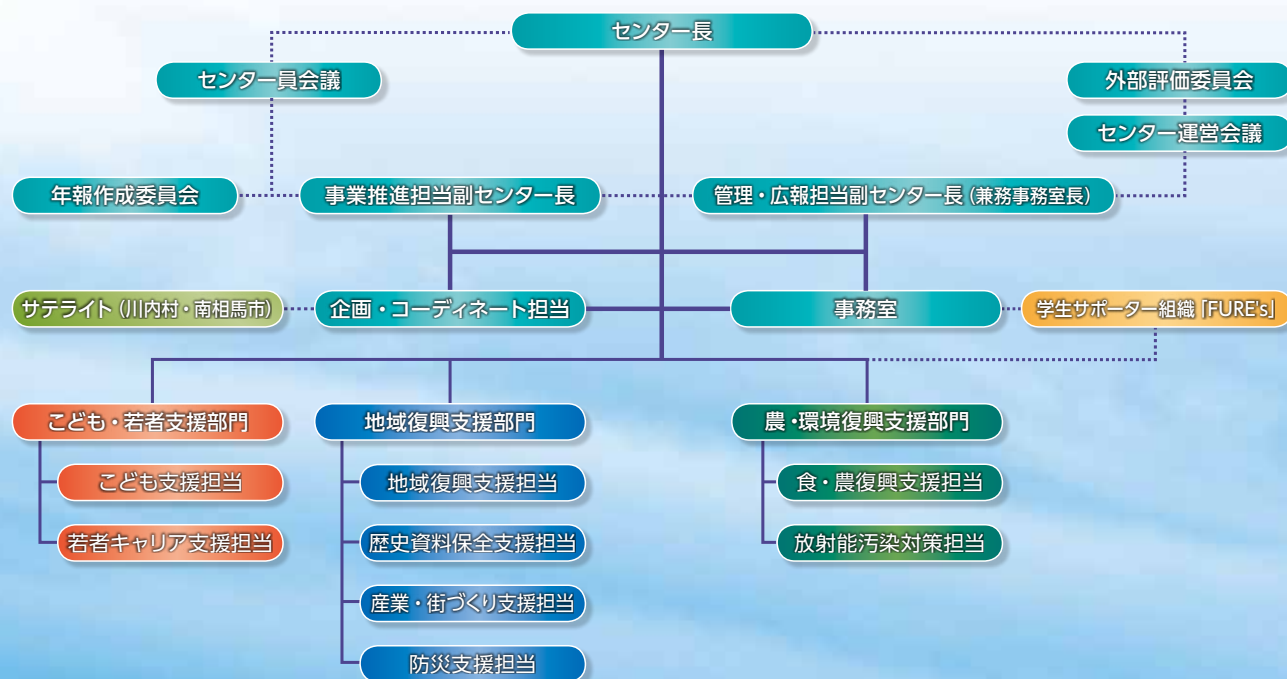
Fukushima Future Center for Regional Revitalization

うつくしまふくしま未来支援センターは、3つの部門とその下に設置されている8つの担当（プロジェクトチーム）を配置しています。学術・研究を第一義とする「研究センター」ではなく、地域の復興・復興に寄り添う「支援センター」として実践的な活動を展開しています。

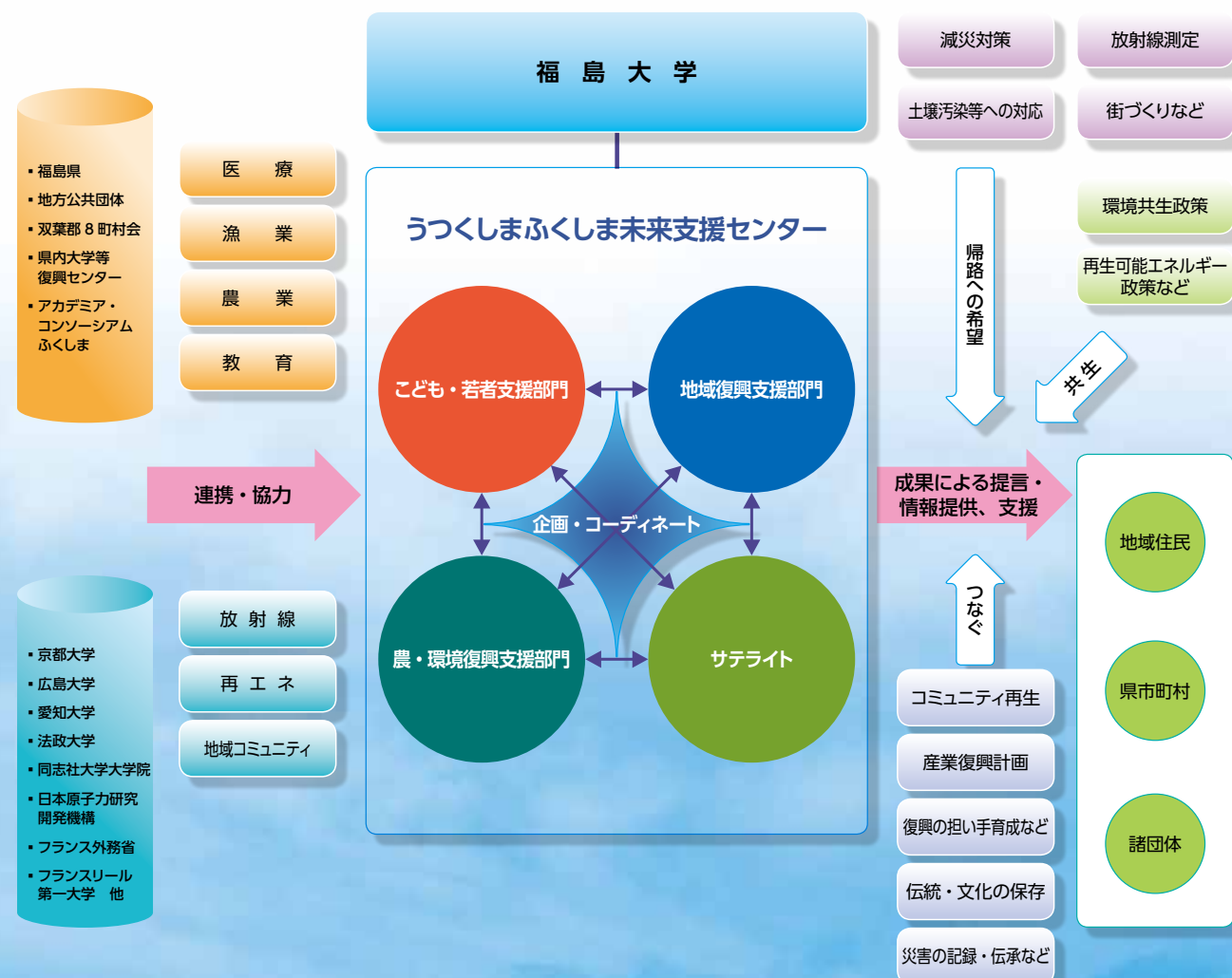
FURE
うつくしまふくしま未来支援センター

Fukushima Future CenterのFUとRegional RevitalizationのREから作られています。「フレ」と呼び、「フレ！フレ！Fukushima」という意味が込められています。福島県は多重災害により様々な課題を抱えていることからあえてシンプルなデザインにしました。Fは緑色とし、県土の70%を占める「森林」を表しています。Uは茶色とし、福島県の「豊かな大地」を表しています。Rは水色とし、福島県の「ほんとの空」、そして「水産資源が豊富な海」を表しています。Eはピンク色とし、福島県民、特に子供たちの「未来、夢」を表しています。

センター組織図（平成27年度）



センター概略（平成27年度）



うつくしまふくしま未来支援センターの 1年のうぶぎ

2014年度のうつくしまふくしま未来支援センターのうぶぎをダイジェストでお伝えします。

2014

【3月】

- 郷土に想いをよせる同窓会（山形の部）開催（2日）
- センター棟竣工記念「大都市シンポジウム『福島
の「今」、そして「未来」へつなぐ』」（会場：大阪・
大阪大学中之島センター）開催（8日）
- 郷土に想いをよせる同窓会（大阪の部）開催（16日）
- シンポジウム「福島の復興の課題と研究者の役割」
（共催）開催（17日）

【4月】

- 中田スウラセンター長就任（1日）
- 4部門制から3部門制へ移行
- センターホームページに「展示ホールのご案内」
を新設

【5月】

- 「若者キャリアキャンパスカフェ」開催
（1日）※以降も定期的に開催
- 福島県議会視察受入（19日）
- 地域住民および学内教職員・学生に向けた「セン
ター活動報告会（第1回）」開催（21日）

【10月】

- 経済同友会広報誌「経済同友」にセンターのコラ
ムが連載開始（10月号より約20回掲載予定）
- キャリア教育シンポジウム「被災地で考える若者
のキャリア形成支援」開催（5日）
- 日本赤十字社との福島県における復興への取り組
みに関する相互連携協定締結（8日）
- 「双葉地方八町村自治体若手職員研修会（第1回）」
開催（10日）

【11月】

- 郷土に想いをよせる同窓会「葛尾村の部」開催（い
わき市）（9日・10日）
- 職場見学・体験バスツアー「会津のものづくり伝
統と新しさにふれてみよう」開催（15日）
- 「復興の担い手育成事業」第六回放射線（能）測
定スキルアップ事業開催（26日）
- 「双葉地方八町村自治体若手職員研修会（第2回）」
開催（28日）
- 郷土に想いをよせる同窓会「新聞づくり事業」開
催（栖葉町）（29日）

【12月】

- 郷土に想いをよせる同窓会「新聞づくり事
業」開催（栖葉町）（7日）
- 日本赤十字社との相互連携協定締結記念講演会
「個人情報保護に関する講演会」開催（16日）
- 「ふくしまからはじめよう。未来づくり」H A J I
ME P P E 〃ふくしま復興塾主催 講演会「地
域産業の未来を拓く」会津と新潟の変革の現場
から」開催（20日）
- ふくしまからはじめよう。サミット in 九州（共催）
開催（22日）

【6月】

- 「センター活動報告会（第2回）」開催（18日）
- 平野元文科大臣視察受入（29日）
- 学生災害ボランティアウィーク開催（30日・4日）

【7月】

- 「センター活動報告会（第3回）」開催（16日）
- 米国大学生訪日団 レクチャー&報告会（18日）
- 郷土に想いをよせる同窓会「大熊町中学生の部」
開催（大玉村）（20日・21日）

【8月】

- 福島大学オープンキャンパス（10日）
- 郷土に想いをよせる同窓会「大熊町小学生の部」
開催（大玉村）（18日・19日）

【9月】

- 2014全国教職員セミナー in 福島 福島特別
企画「原子力災害からの復興に向けた協同の力」
開催（6日）
- 福島県内中学生向け「平成26年度福島学プログ
ラム」（共催）開催（7日）
- 福島県議会OB視察受入（8日）

【1月】

- 防災支援担当ブログを開設（吾妻山噴火警報関連
）（9日）
- 郷土に想いをよせる同窓会「新聞づくり事業」開
催（浪江町）（17日）
- 「懇話会ふくしま再生と歴史・文化遺産2015」
（共催）開催（25日）
- 「復興の担い手育成事業」第七回放射線（能）
測定スキルアップ事業開催（27日）

【2月】

- 郷土に想いをよせる同窓会「新聞づくり事業」開
催（浪江町）（1日）
- 「双葉地方八町村自治体若手職員研修会（第3回）」
開催（27日）

【3月】

- シンポジウム「みんなの故郷に想いをよせながら」
開催（1日）
- 京都シンポジウム「ほんとの空が戻る日までー東
日本大震災及び原発事故からの福島への闘い」開
催（8日）
- 「東日本ー京都 交流・相談会」開催（8日）
- 防災教育教材開発プロジェクト（12日）
- シンポジウム「原発事故4年目における風評被害
の構造と食と農の再生」開催（14日）
- 第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラム
「国際シンポジウム 複合災害からの復興と災害
復興学の確立」開催（16日）

2015

7月18日／米国大学生訪日団
レクチャー&報告会

8月18日／郷土に想いをよせる同窓会
「大熊町小学生の部」を実施

10月8日／日本赤十字社との福島県にお
ける復興への取り組みに関す
る相互連携協定書を締結

1月27日／「放射線（能）測定スキル
アップ」研修会

2月1日／新聞づくり事業（浪江町）

3月1日／シンポジウム「みんなの故郷に
想いをよせながら」開催

3月8日／京都シンポジウムを開催



こども・若者支援部門
スタッフ一覧
森 知高
【役職】こども・若者支援部門長 こども支援担当マネージャー
【所属】人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻 特任教授
【専門】体育科教育
本多 環
【役職】こども支援担当
【所属】特任教授
【専門】教育カウンセラー
安田 俊広
【役職】こども支援担当
【所属】人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻 准教授
【専門】運動生理学
浅井 健悟
【役職】こども支援担当
【所属】特任研究員
【専門】臨床心理学、教育心理学
鈴木 裕子
【役職】こども支援担当
【所属】客員研究員(外部組織から受入)
【専門】こども支援コーディネート(大熊町教育委員会支援)
五十嵐 敦
【役職】若者キャリア支援担当マネージャー
【所属】総合教育研究センター 教授
【専門】職業心理学、キャリア発達心理学
今泉 理絵
【役職】若者キャリア支援担当
【所属】特任助教
【専門】キャリア形成、キャリアカウンセリング



大熊町の子どもたちが地域の方に盆踊りや太鼓を教えている様子



若者キャリアキャンパスカフェで職業興味検査の解説を聞く参加者



今の生活の様子についてこどもたちの声を直接聞き、受けとめる学生ボランティア

福島から県外に避難中のこどもはいまだに少なくありませんが、福育は県内にこどもたちに戻ってきてほしいという考えで行っているわけではありません。こどもは今住んでいるそれぞれのところで育てばよく、郷土は落ちてしまった教育の土台を埋めるための「基

育力、こどもが通う「学校」の教育力、そしてこどもを取り巻く「地域」の教育力の3本柱からなり、これらをバランスよく高めていくことを目的としています。例えば、こどもたちの学校に赴き、福大の学生ボランティアが学習支援や運動支援を行ったり地域の方が昔ながらの行事を教えたりするのは、学校と地域の教育力に結びつきます。3つの教育力のうち一つだけが伸びたり伸びなかったりするのではないよう、偏りなく上げていくことは簡単ではありませんが、福育を進めることでこども教育ならではの「復旧・復興」につながると思っています。

福島から県外に避難中のこどもはいまだに少なくありませんが、福育は県内にこどもたちに戻ってきてほしいという考えで行っているわけではありません。こどもは今住んでいるそれぞれのところで育てばよく、郷土は落ちてしまった教育の土台を埋めるための「基

こどもと同様に、震災によって被災した若者(中学生・高校生・短大生・大学生など)の多くは、将来の見通しが揺らぎ、日常生活が不安定な状態に陥ってしましました。そこで若者キャリア支援担当では、若者が自らのキャリア形成に積極的に取り組むことができるよう、教育的支援や社会的自立に向けた取り組みを展開しています。

現在のところ、福育による成長の度合いは顕著には表れていませんが、個々の能力に合わせて少しずつ成長させていくことができばと思います。

めるように働きかけることを目的として、「若者キャリアキャンパスカフェ 職場見学・体験パスツアー」を実施しました。若者は職場を見学するだけでなく実体験することで関心を高めたようでした。平成25年度から引き続き実施した「若者キャリアキャンパスカフェ 進路選択シンキングフェスタ」についても、若者はさまざま



「若者キャリアキャンパスカフェ 職場見学・体験パスツアー」で、企業担当者の話に熱心に耳を傾ける参加者



「若者キャリアキャンパスカフェ 進路選択シンキングフェスタ」の様子。職業興味検査の解説を受ける学生



大熊町のこどもたちが避難先から一堂に会した「郷土に想いをよせる同窓会」。自分たちの夢や大熊町の特産物などをカルタに描き、実際に遊んで楽しみました。

こども・若者支援部門

こども・若者支援部門長
こども支援担当マネージャー
人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻 特任教授

森 知高

1948年岡山県生まれ。昭和52年、東京教育大学体育学研究科修了。同年、福島大学着任。専門は体育哲学・体育科教育学で、こどもの健康と運動など、こどもの体力向上に取り組んできた。



——東日本大震災から4年以上が経過し、避難を強いられているこどもや災害の影響を受けたこどもの様子はどうですか。

震災から間もない頃は、ボランティアによる単発の交流イベントなどが多く実施されていましたが、こども支援担当では「継続的」「専門的」「個別的」な支援が重要と考え、同窓会モデル化事業やほつとルームの運営(P16参照)といった定期的な活動で、こどもたちに寄り添ってきました。しかし震災から4年以上が経過した今、避難

から生活が落ち着くまでの空白の期間にこども教育の土台が形成されず、学力や体力などが落ちてしまったという問題などが浮き彫りになってきました。とはいえ、全てのこどもの土台が落ちてしまっただけではありません。

例えば、避難生活の中で悩みや不安といった「困り感」を抱えているものの、そのことを周りに訴えることのできるこどもの場合、専門家が支援にあたりますのでよいのですが、気をつけなければならぬのは、お父さんやお母さんが頑張っているから自分も頑張ら

なくてはいけないと一人で困り感を抱え、葛藤するこどもの場合です。震災後の複雑な事情から土台が落ちてしまった、そのようなこどもたちに焦点を当て手を差し伸べるのが、私たちの役目だと思っています。

——こども支援担当は具体的にどのような活動を行っていましたか。

こども教育の土台を埋めるための一環として、平成26年度に力を注いだのが「福育」です。福育は、こどもに最も身近な「家庭」の教

な職業の方に仕事の様子を聞いたり、質問したりしながら、職業を選択する上での参考にしていました。

一過性の支援ではなく持続性のある人材育成を展開し、いずれは地域の活性化に結びつけていければと思っています。

こども支援担当

ニーズに合わせた
支援活動を実施

東日本大震災および原発事故により大きく変化した環境の中で、こどもたちは様々な「困り感」を抱くようになりました。そんなこどもたちが自分らしく主体的に活動できるようにするための支援として、平成24年度に始まった文部科学省委託事業「郷土に想いをよせる同窓会モデル化事業」は3年目を迎えました。当初は、震災により離ればなれになった



大熊町のこどもたち一人ひとりの夢が書かれたパネル

こどもや保護者、地域の方々の再会の場の提供を目的として行われた事業でした。しかし、時間の経過とともにこどもや保護者の状況やニーズが変化したことから、再会の場としてだけでなく自分が住んでいた故郷に想いをよせながら、新たな場所でも自分らしく歩むためのエネルギーを蓄える場となるような支援を意図的に行っていました。

このこどもたちを対象に、オリエンテーリングを実施しながら自分たちの故郷に関するクイズを解いたり、故郷に伝わる踊りを踊ったり、自分たちの想いや夢を自作のカルタやパネルに表したりする活動を行いました。

震災から長い時間が経過する中で、こどもの教育に関わる様々な課題が浮き彫りとなってきました。そこで、学校教育力・家庭教育力・地域教育力の向上を目指し、実態に即した支援を行っています。放射線量が高く、屋外活動が難しくなった地域の小学校を定期的に訪れ、学習支援や運動支援、学校行事への支援を行ったり、「親子関係づくりプログラム」の実施によ



うつくしまふくしま未来支援センターにある「相談室 ほんとろーム」



葛尾村の「郷土に想いをよせる同窓会」では、参加者全員で葛尾村の四季をイメージしたパネルを作りました。

相談室「ほんとろーム」の
運用を拡大

「ほんとろーム」は、環境の変化により自分の居場所を見失ったり、多大なストレスや「困り感」を抱えていたりすることもや保護者からの相談を受け、課題解決に向けた支援を行う場です。自己肯定感を高めながら新たな夢や希望に向かって歩むための手助けをする「子ども支援コーディネーター」が、学校・保護者・地域・専門機関とつながりながら、個別的・専門的な支援を行っています。活動の場所はうつくしまふくしま未来支援センター内だけでなく、大熊町、大阪府など、県内外に広がっています。

実態に即した
様々な教育的支援を展開

り、楽しく遊び運動する中で親子の関係を深める支援を行ったりしています。

このような教育的支援を行うことにより、学校・家庭・地域の教育力が高まり、こどもが抱えた発達課題解決支援に繋がると考えています。



学校行事の団子さして、学生ボランティアが地域の方と一緒に、お餅のつき方をこどもたちに教えました。

若者キャリア支援担当

進路について考える
機会づくり

「東日本大震災を経験したからこそ、これまで以上に視野を広げ、自分の可能性に気づき、自分らしいキャリアを柔軟に再構築していってほしい」。そんな願いのもと、若者が将来に向けて一歩踏み出すきっかけづくりを支援

する場として、「若者キャリアキャンパスカフェ 進路選択シンキングフェスタ」が平成25年8月からスタートしました。平成26年度はアウトリーチ活動として会津、南相馬、いわきの3会場出張開催を行いました。

会場には「職業興味検査」「進路・就職個別相談」など5つのコーナーを設置しました。メインの「キャリア座談会」では、福島



キャリア座談会では、学生が各職業で活躍する講師へさまざまな疑問をぶつけ、今後の参考にしていました。

職場見学体験で
関心を高める

普段は見ることでできない仕事の現場を、直接目で見てふれて、肌で感じ、復興への取り組みと将来の自分の進路・職業選択について、関心とモチベーションを高めてもらうことを目的に、平成26年度は新たに「若者キャリアキャンパスカフェ 職場見学・体験バスツアー」を催行しました。特に、ものづくりの分野への関心を高めるため、会津地域の最先端の技術と伝統技術にふれる機会を提供しました。

ランドセル工場では、最新の機械と一つひとつ丁寧に手作りされる製造工程を間近で見学しました。お客様の希望にそって形・大きさ・色・デザイン・刺繍などを組み合わせる完成する商品の魅力に、参加者は圧倒された様子でした。



会津塗の下地(地付け)、塗り(上塗り)、加飾(蒔絵)を見学後、絵付けに挑戦。オリジナルのお碗や手鏡を作りました。



半導体製造環境を応用したレタス工場の見学。「イノベーションとはどういうことか実際に見て分かった」と参加者

会津塗漆器工房では、一連の製造工程を見学した後、参加者全員が漆器の絵付け体験をしました。「職人の方の技術は簡単に真似できるものではない」「体験してみても、もしかしら自分に向いているかもしれないと思った」などの声聞かれました。

また、半導体製造環境を応用したレタス工場のクリーンルームを見学しました。24時間体制で適正な栽培環境が管理されていること、味や栄養分まで調整できることを知り、農業を専門に学ぶ生徒からはその最先端技術の素晴らしさに驚きの声があがりました。

復興を進め、若者の未来を希望の持てるものにしていくこと。そのために、予期せぬ環境下でも自分を生かす新しい将来像を「たくましく」「柔軟に」考え、行動できるように、我々はこれからも若者の背中を押していきたいと思

地域復興支援部門
スタッフ一覧
初澤 敏生
【役職】地域復興支援部門長
【所属】人間発達文化学類 文化探究専攻 教授
【専門】経済地理学
丹波 史紀
【役職】地域復興支援担当マネージャー
【所属】行政政策学類 地域と行政専攻 准教授
【専門】社会福祉論
天野 和彦
【役職】地域復興支援担当(被災者支援)
【所属】特任准教授
【専門】社会教育、生涯学習
佐藤 彰彦
【役職】地域復興支援担当
【所属】特任准教授
【専門】まちづくり、地域コミュニティ
鈴木 典夫
【役職】地域復興支援担当(ボランティア育成)
【所属】行政政策学類 地域と行政専攻 教授
【専門】地域福祉
開沼 博
【役職】地域復興支援担当
【所属】特任研究員
【専門】地域社会と市民生活分野
小笠原 隼人
【役職】地域復興支援担当
【所属】契約職員
伊達 洋駆
【役職】地域復興支援担当
【所属】客員研究員(外部組織から受入)
【専門】地域社会と市民生活分野
藤倉 庸子
【役職】地域復興支援担当
【所属】契約職員
菊地 芳朗
【役職】歴史資料保全担当マネージャー
【所属】行政政策学類 社会と文化専攻 教授
【専門】考古学
高木 亨
【役職】産業・街づくり支援担当マネージャー(観光担当)
【所属】特任准教授
【専門】観光経済学
吉田 樹
【役職】産業・街づくり支援担当(交通経済)
【所属】経済経営学類 国際地域経済専攻 准教授
【専門】交通経済学
間野 博
【役職】産業・街づくり支援担当(街づくり支援)
【所属】特任研究員
【専門】街づくり支援
佐藤 理夫
【役職】産業・街づくり支援担当(再生可能エネルギー支援)
【所属】共生システム理工学類 産業システム工学専攻 教授
【専門】製造プロセス・化学工学
大平 佳男
【役職】産業・街づくり支援担当(再生可能エネルギー支援)
【所属】特任研究員
【専門】再生可能エネルギー分野
斎藤 喜章
【役職】産業・街づくり支援担当
【所属】客員研究員
須江 浩子
【役職】旧警戒区域内一時帰宅交通支援担当
【所属】契約職員
渡辺 正彦
【役職】産業・街づくり支援担当(ふくしまスマートシティプロジェクト)
【所属】客員教授 関東邦銀行顧問
星 効
【役職】産業・街づくり支援担当(ふくしまスマートシティプロジェクト)
【所属】連携研究員 関東邦銀行
三村 悟
【役職】防災支援担当マネージャー(科研費S担当)
【所属】特命教授(客員教授) 国際協力機構(JICA)
【専門】海外への情報発信、諸外国・機関との連携推進、防災教育
中村 洋介
【役職】防災支援担当(断層調査・防災教育)
【所属】人間発達文化学類 文化探究専攻 准教授
【専門】地震災害学
瀬戸 真之
【役職】科学研究費補助金Sチーム / 防災支援担当
【所属】特任研究員
【専門】文理横断的な地理学研究
堀川 直子
【役職】科学研究費補助金Sチーム
【所属】特任研究員
安齋 祥
【役職】科学研究費補助金Sチーム
【所属】契約職員



被災地での文化財の救出の様子。平成25年3月には被災した文化財等の救援・修復活動に貢献したとして文化庁長官から表彰されました。



佐藤彰彦先生が支援する「とみおか子ども未来ネットワーク」では、富岡町の未来を語る場として全国各地でタウンミーティングを開催しています。



富岡町生活復興支援センター「おだがいさまセンター」で月に一度開催される歌声喫茶

様々な分野の専門家が多方面からサポートする被災者支援の最前線

地域復興支援部門

地域復興支援部門長
人間発達文化学類 文化探究専攻 教授

初澤 敏生

1962年埼玉県生まれ。立正大学大学院文学研究科地理学専攻中途退学。昭和63年福島大学教育学部助手、同講師、同助教授を経て平成19年より福島大学人間発達文化学類教授。専門は経済地理学。事業所の実態調査を通じて地域経済の構造を分析している。



——地域復興支援部門の概要を教えてください。——

当部門は、こども支援と農業復興支援以外の全ての人文社会系の分野をカバーするという幅の広い活動が特徴です。具体的には、仮設住宅もしくは借り上げ住宅で生活する避難者の支援、商工・観光・水産などの産業の復興支援、避難地域での文化財の救出・保護、災害が起こりやすい地域の研究とそれに基づいた防災教育、被災地域の新しい都市計画や交通計画の支援を行っています。

部門は支援内容によって4つの担当に分かれています。原発事故が起こった福島県は諸問題が複雑に絡み合っていますので、一人の研究者が産業復興もやれば街づくりへの助言も、避難者支援も行うというように、各人ができることを多領域にわたってやっているという状況です。それでも求められていることに対し、今できていることは圧倒的に少ないと感じています。

——部門としての運営方針について教えてください。——

私はこの部門は被災者支援の最前線だと思っています。ですからそれぞれの担当には被災者に対してどのような支援ができるかということを常に求めて活動してもらっています。典型的なのは避難者支援ですが、街づくり支援においても被災住民が住みやすい街にするために、異なる視点をもつ行政と住民の溝をいかに埋めていくかが重要で、産業復興についても、事業所を一つ一つ訪問して、働いている人の声を集め、それを復興計画に生かしていくことを行っています。文化財の救出・

クが増大していく中、ますます重要になってくると思います。

また、地域復興支援担当の佐藤彰彦先生は、新しい街づくりにおける住民意向の集約化を目指し、話し合いの場を設ける活動を積極的に行っています。住民同士だけでなく、行政職員へのワークショップも進めています。復興を可能にする新しい街づくりのためには住民も行政も変わらなければなりませんから、そのための支援を展開しているところです。

産業復興については、具体的な実態が把握されないまま復興計画が作られている状況があります。これは大変な問題で、現状を捉えていない計画では有効性は期待できません。そのため、産業・街づくり支援担当者が産業団体や事業所、市民に直接ヒアリングや調査を行い、それに基づいて方向性を打ち出し、市町村の復興計画に反映させています。

現在行われている復興に向けた様々な活動は、政府の莫大な交付金により推し進められています。この復興パブルがはじけた時、一体被災地域はどうなってしまうのか、私は非常に危惧しています。今回、原発事故により大きな被害を受けた地域は、もともと産業が少なく若者の流出が著しいという問題を抱えていました。だからこそ基幹産業となる原発に頼らなければならなかったのです。その原発がなくなってしまうと、何を核にして地域を創ればよいのか、つまり新しい産業をいかにして生み出すかということは、今後大きな課題になってくるでしょう。

基幹となる産業がなく、生活の基盤が作れなければ避難した住民は帰還することができません。若い避難者が戻らなければ人材は不足し、街の活力は失われ、私たち

——活動を行う中で見えてきた課題もあるのでしょうか。——

が目指す新しい街づくりを進めることも困難となります。産業と街づくり、そして地域の復興はそれほど深く結びついた問題なのです。産業を発展させていかなければ福島復興はあり得ません。それは喫緊の課題であり、今後5年、10年の歳月をかけて成し遂げなければならぬ問題であると捉えています。



今後は蓄積してきた研究データをもとに市民向けの防災教育教材も開発していく予定です。

地域復興支援担当

地域復興支援担当では、福島県の被災地における地域再建に向けて、①被災自治体の復興計画策定支援、②震災被害と被災者の実態把握、③震災記録のアーカイブス事業、④災害支援スキームの構築、⑤復興人材の担い手育成、⑥今後の地域復興に向けた各種提言活動などを行ってきました。

①被災自治体の復興計画策定支援では、大熊町・双葉町・富岡町などを中心に携わりました。なかでも富岡町では、計画策定委員会（委員）はもとより、若手・中堅職員、町と関わりの深い専門家を対象としたワークショップを進めてきました。これらの全工程に参加者の「声」を集約する質的統合法（KJ法）を採用し、ボトムアップ型の計画づくりを進めてきました。

②震災被害と被災者の実態把握では、避難・賠償・除染・仕事・教育・医療福祉と多岐にわたる「ふくしま」のテーマについて、「福島エクスカージョン」という現地視察プログラムを実施し「課題発見・課題解決」のサイクルを循環させる仕組みづくりをしてきました。また、震災後の介護需要の高まりを検証する調査研究事業



意見の統合結果（意見地図）を共有する町民



「福島エクスカージョン」の様子

にも取り組みました。
③震災記録のアーカイブス事業では、葛尾村の震災記録集作成にも携わり、学生たちと共に村民各世帯からの聞き取り調査に取り組みました。
④災害支援スキームの構築では、富岡町の被災者支援拠点おだがいさませセンターを中心に、

仮設住宅や借り上げ住宅の集会所などで心を元気にする歌声喫茶を開催し、「心の復興」に取り組んでいます。また、災害学生ボランティアも継続的に仮設住宅や被災自治体の子どもたちへの支援を行っています。
⑤復興人材の担い手育成では、双葉地方町村会や双葉8町村と



伊達市小国地区の地域復興プラン作成支援の様子

も連携し、双葉地方若手職員研修会を実施し、郡内の若手職員を中心に約20名でお互いの復興に関わる日常的な活動の意見交換や先進的な事例を学びながら研修プログラムを実施しました。
⑥日本学術会議の委員会にFUREの構成員も多数参画し、平成26年9月30日に「東日本大震災福島第一原子力発電所事故による長期避難者の暮らしと住まいの再建に関する提言」をまとめ、東日本大震災における住民の生活再建と被災地の復興に関する提言を行いました。



「福島エクスカージョン」におけるワークショップの様子

歴史資料保全支援担当



歴史資料の記録撮影(FUREにて)



被災民具資料の記録（いわき市にて）

歴史資料保全支援担当は、次の2点を活動の大きな目的にしています。

①東日本大震災により被災した福島県内の歴史・自然史資料を救出・保護し、その清掃・修復・記録化等を行うこと。
②これら歴史・自然史資料の保全と活用により、文化財の側面から福島県の復興を中長期的に支援すること。

今年度私たちが取り組んだ活動のひとつに、いわき市内でレスキューされた個人宅の民具資料の整理があります。

東日本大震災の影響で福島県内でも数多くの建築物が被災しましたが、茨城史料ネットのメンバーがいわき市で地元の被災状況を調査し、平成24年春に全国からボランティアが集まり、被災



被災民具資料の記録（いわき市にて）

した蔵から大量の民具類をレスキューしました。

その後、一時保管と整理作業のための施設の確保に難航しましたが、いわき市が所有する施設の使用許可が下りたことを受け、平成26年春に地元の地区振興会、茨城史料ネットとともに一時保管施設に搬入しました。

これら民具資料の整理・記録を今年度の課題とし、6月に地区振興会、茨城史料ネットなどと第1回目の作業に着手しました。資料の記録・整理方法については研究分野によって異なるため、専門家の指導が必要となります。本担当では民具整理用の資料カード、撮影用の背景シート、梱包資材などを準備。行政政策学類で博物館学芸員資格の取得を希望する学生の参加を得たほか、写真撮影や記



被災歴史資料のクリーニング作業(FUREにて)

録の取り方については福島県立博物館の民俗分野担当の学芸員の指導を仰ぎながら進めました。なお、この整理作業は年度内に再度実施し、次年度以降も継続して行う予定です。
その他、今年度からはFUREの資料保管室において、ふくしま歴史資料保存ネットワークの呼びかけによる被災資料の記録整理作業も、月2〜3回程度のペースで実施しました。行政政策学類で「古文書学実習」を履修する学生を中心に、学外からもボランティアでの参加をいただいています。幸いにして学外からの関心も高く、TV・新聞などのマスコミにも幾度となく取り上げられました。

産業・街づくり担当

産業・街づくり支援担当は、FUREの中でも幅広い分野をカバーする担当部署となっています。主な取り組み分野は、産業・交通・都市計画、再生可能エネルギー、スマートシティなどです。所属する研究者は8名。大学ならではの調査研究支援、学識者として委員会等でのアドバイザー支援、地域活性化等での支援など、地域からの要請に応えるべく、多様な取り組みを支援しています。また、南相馬市における帰宅支援バスの運行や岳温泉を中心とするあたたら高原エリアでのエリア放送の実験、いわき市高部地区で集落活性化事業などにも取り組んでいます。

ここでは、平成26年までの取り組みの中から特徴的なものをご紹介します。

まず南相馬市原町区における商工業実態調査を原町商工会議所と一緒にしています。南相馬市原町区は東京電力福島第一原子力発電所から20〜30km圏内に位置しています。原発事故後、経済活動が衰退してしまつたため、その振興が急務の課題です。平成23年以降継続的に実態調査を行っ



教育観光を担うNPOへの聞き取り調査(水俣市にて)

て地域の問題を把握し、解決のための提言を行っています。また平成24年から浪江町の復興まちづくり計画に関するアドバイザーとして、これからの浪江町の街づくりに関わっています。今年度は計画の具体化に取り組んでいます。



浪江町復興街づくり計画ワークショップの様子

さらに平成26年度「新しい東北」の事業として、テレビユー福島 の応募が採択されて行うことになった、データ放送を活用した買い物支援実証実験に参画。この実証実験は昭和村と川内村の約50世帯が対象で、川内村サテライトと協力しながら、モニター世帯への聞き取り調査やフォローを行っています。

他にも担当メンバーの大部分が関わっている「文部科学省科学研究費補助金基盤研究(S)」の一環として、熊本県水俣市での調査研



商工業実態調査(南相馬市原町区にある企業への聞き取り調査)



テレビのデータ放送を活用した買い物支援(昭和村モニター世帯での様子)

究を行っています。高度経済成長期に発生した水俣病の経験を踏まえ、街づくりを行っている水俣市から、福島ヘフィードバックできることを導き出す取り組みを行っています。

防災支援担当



フィリピン台風被災地での聞き取り調査

災害とは、地震や台風、火山噴火といった自然現象や人為的な事故という「ハザード」が、人の生命や生活、社会や環境に悪影響を与えた時に発生するものです。災害の被害を減らすためには、そのようなハザードに備える「防災」が必要になります。

中に取り入れること、特に、復興の中に次の災害への備えを含めることが重要です。防災支援担当は、東日本大震災の経験に加え、世界各地で発生する災害の事例をもとにした知識や教訓を、福島の復興現場に活かすとともに、後世の人々、世界の人々に伝えることを目的として活動しています。

吾妻山の火山活動に関する調査と情報提供

東日本大震災前から火山活動が活発な吾妻山は、平成26年12月には気象庁による警戒レベルが引き上げられました。防災支援担当では、FUREのホームページで解説し情報提供するとともに、火山泥流の発生予測に関する地形学的な調査を行っています。



現在の吾妻山

国内外の災害調査

国内および世界各地で発生した自然災害の調査を、平成26年には広島県広島市(土砂災害)、長野県白馬村(地震)、南太平洋・ソロモン諸島(洪水)などで行い、

災害の発生メカニズムや災害リスクの高い場所の特徴などを明らかにしています。



ソロモン諸島洪水被災地での聞き取り調査

福島の経験を世界と共有

福島の災害経験を世界の人々と共有するため、平成26年6月



アジア防災閣僚級会合での発表

ふくしま防災まち歩き

にタイで開催された「アジア防災閣僚級会合」で福島の経験と教訓について発表しました。また、世界各国の政府関係者、マスコミ関係者に「福島の経験から学ぶ」という内容の講演を行いました。

災害はその地域の地形や歴史と深い関わりがあり、自分の住むまちの地理と歴史を知ることが災害の危険を理解することにもつながります。防災支援担当では、自分の住むまちの災害リスクを知り、また避難の際にはどんな危険があるのかを、自分の足で歩いて目で見える、防災まち歩きを行いました。



防災まち歩きの様子

農・環境復興支援部門
スタッフ一覧
塚田 祥文
【役職】農・環境支援部門長
【所属】環境放射能研究所 教授
【専門】環境中の放射性及び安定元素の移行・動態に関する研究
小山 良太
【役職】副センター長(事業推進担当)、食・農復興支援担当マネージャー
【所属】経済経営学類 国際地域経済専攻 教授
【専門】農業経済学、地域経済学、協同組合学
野川 憲夫
【役職】食・農復興支援担当(農業復興支援コーディネーター)
【所属】特任教授
石井 秀樹
【役職】食・農復興支援担当
【所属】特任准教授
【専門】造園学、地域経済学
小松 知未
【役職】食・農復興支援担当
【所属】特任准教授
【専門】農業経営学
朴 相賢
【役職】食・農復興支援担当
【所属】特任研究員
平井 有太
【役職】食・農復興支援担当
【所属】客員研究員
河津 賢澄
【役職】放射能汚染対策担当マネージャー
【所属】共生システム理工学研究科 研究プロジェクト型実践教育推進センター 特任教授
【専門】環境政策、エネルギー政策
山口 克彦
【役職】南相馬サテライト長兼務放射能汚染対策担当
【所属】共生システム理工学類 人間支援システム専攻 教授
【専門】物性物理学・複雑系科学
大瀬 健嗣
【役職】放射能汚染対策担当
【所属】特任准教授
【専門】放射線防御
北山 響
【役職】放射能汚染対策担当
【所属】特任研究員
【専門】放射線動態解析
島 長義
【役職】放射能汚染対策担当(地質調査・防災教育)
【所属】特任研究員
【専門】地質調査及び防災教育
鈴木 千佳
【役職】放射能汚染対策担当
【所属】契約職員
【専門】放射線計測
菅野 章
【役職】放射能汚染対策担当
【所属】契約職員
加藤 美紀
【役職】放射能汚染対策担当
【所属】契約職員



農業用水のサンプリング

研究者の目線ではなく、学生が生産者にインタビューしたり、収穫を手伝ったり、作物を検査したりと、生産から販売までを学生が体験して伝える社会体験学習として農家の皆さんと同じ立ち位置で活

復興を目指して、意識調査と復興プラン策定の支援、福島市で果樹経営の販売回復・産地再生への支援、学生合同プロジェクト「おかわり農園(福島のお米の美味しさを再認識してもらい、地産池消を

福島県産農作物の生産・販売の復興を指して、意識調査と復興プラン策定の支援、福島市で果樹経営の販売回復・産地再生への支援、学生合同プロジェクト「おかわり農園(福島のお米の美味しさを再認識してもらい、地産池消を



山菜の調理

翌年の平成24年度から大熊町との共同で農作物の試験作付を行っています。表土剥き取りや肥料の工夫などによって、今では試験作付で収穫される作物中放射性セシウム濃度は、100ベクレル/kgを下回るようになりました。イネ栽培に欠かせない農業用水については農家の皆さんの不安も大きいことから、平成25年から継続的な調査を行っており、放射性セシウム濃度が徐々に減少していることが分かりました。また、営農再開地域及び帰還困難区域においても農業用水を調査し、原発から80km圏内における農業用水中放射性セシ

ウム濃度マップを作成しました。更に、福島市、伊達市及び大熊町において大気中放射性セシウム濃度を継続して測定しています。交通量の多い福島市内と伊達市の農耕地における濃度変化は比較的同様であり、吸入による被ばく線量も低いものでした。また、大熊町での大気中放射性セシウム濃度は、福島市内より幾分高い値でしたが、吸入による被ばく線量は1mSvを大きく下回る値でした。

食・農業復興の分野では、生産者・消費者が共に納得できる放射能検査体制を作り、福島県産の農作物を全国に届けることに力を入れました。例えば、学生と一緒に生産者と消費者を結びイベント「マルシェ」を行っています。研究者の目線ではなく、学生が生産者にインタビューしたり、収穫を手伝ったり、作物を検査したりと、生産から販売までを学生が体験して伝える社会体験学習として農家の皆さんと同じ立ち位置で活

出荷規制されていますが、各地域でこれまで一般的に食されていた食材です。これらの食材は調理加工のち食されますので、その処理によってどの程度放射性セシウム濃度が低減されるかについて調べています。例えば、タケノコ等は灰汁抜きをすることで放射性セシウム濃度は半減しました。また、イノシシ肉を血抜きすることで大幅な減少がみられました。

帰還困難区域の外であっても、戻りたくても戻れない人がたくさんいます。生活基盤が整っていないことが大きな要因です。農家の皆さんも営農を再開したくても農地が荒れ果て再開まで時間を要することや、風評被害を心配して営農に踏み切れない状況が見受けられます。営農を再開した地域の農作物は安全であることを一般の皆さんに正しく知っていただく活動も、私たちの取り組みの一つです。福島をはじめ国内各地での取り組みも行っていますが、福島から世界に向けて情報を発信する必要もあります。平成27年3月に仙台・福島で開催される「国連防災世界会議」や、平成27年5月に福島市

ウム濃度マップを作成しました。更に、福島市、伊達市及び大熊町において大気中放射性セシウム濃度を継続して測定しています。交通量の多い福島市内と伊達市の農耕地における濃度変化は比較的同様であり、吸入による被ばく線量も低いものでした。また、大熊町での大気中放射性セシウム濃度は、福島市内より幾分高い値でしたが、吸入による被ばく線量は1mSvを大きく下回る値でした。

動を行い情報を発信することができました。

他には、どのような取り組みを行っていますか。

今後は、どのような形で支援を続けていくのでしょうか。

目指し福島の地域活性につなげる取り組み」を学生主体で実施し、米の販売も行いました。

飯坂において開催される国際シンポジウム「福島復興に向けての放射線対策に関するこれからの課題」では、農・環境復興支援部門で取り組んできた調査研究の成果を世界に向けて発信する予定です。また、帰還困難区域では、帰還後の営農再開に向けた低減化対策にも取り組んでいく必要があります。本格的な営農再開に向けての課題は、まだまだたくさんあります。これからもデータの蓄積と生産者への支援を続け、私たちも被災した方と一緒に前に進んでいきたいと思っています。



伊達市小国での講演

平成25年度まで別部門で活動していた「放射線対策担当」と「農業復興支援担当」が統合し、新たに「農・環境復興支援部門」としてスタートしました。その理由の一つは、農業復興という大きな課題が残されていたからです。平成26年度から新たな名称となった「食・農業復興支援担当」では放射能汚染状況を把握し、安全・安心な農作物等の生産体制や、県産品の検

査・流通体制の構築について取り組み、「放射能汚染対策担当」では環境放射線や農畜産物、土壌、大気などの放射性物質の測定を進めています。両担当の関係を密にして効果的に活動し、帰還困難区域内・外で営農再開を目指すには、焦点を絞って取り組む必要があると感じています。また、震災から4年経っても風評被害は根強く、農家の方々のモチベーションが下がらないようにするためには、正確なデータを提供し、農業経営も支援することが大切です。そういった点でも、この二担当がさら

農・環境復興支援部門の最大の目的は、「食と農の再生」に向け、農作物の生産から流通まで、農業環境の調査と対策・農業経営の支援活動を行い、農村生活の問題を総合的に解決し、本来の営農生活を取り戻すことです。放射能対策の一例として、震災

今年度から「農・環境復興支援部門」が新たにスタートしましたが、その目的は何ですか。

査・流通体制の構築について取り組み、「放射能汚染対策担当」では環境放射線や農畜産物、土壌、大気などの放射性物質の測定を進めています。両担当の関係を密にして効果的に活動し、帰還困難区域内・外で営農再開を目指すには、焦点を絞って取り組む必要があると感じています。また、震災から4年経っても風評被害は根強く、農家の方々のモチベーションが下がらないようにするためには、正確なデータを提供し、農業経営も支援することが大切です。そういった点でも、この二担当がさら

に協力して活動することが、農業復興に大きな役割を果たすと考えています。

「これまでに行ってきた活動は、どのようなものがあるでしょうか。」

農・環境復興支援部門

農・環境復興支援部門長
環境放射能研究所 教授

塚田 祥文

1960年北海道生まれ。平成13年東北大学大学院農学研究科修了。博士(農学)。環境中の放射性及び安定元素の移行・動態に関する研究が専門。現在、環境中における放射性物質の存在形態と移行・動態に関する研究を主なテーマとして取り組んでいる。他に、営農を再開した地域や営農再開に向けた帰還困難区域での作物中放射性物質濃度調査や低減化にも取り組んでいる。



食・農復興支援担当

住民主体の復興プラン策定を
サポート

伊達市「小国地区復興プラン提案委員会」は、特定避難勧奨地点・水稲作付制限の指示がなされ放射性物質により多大な被害を受けた地域住民が、「自ら地域課題を把握し具体的な復興プランを市・行政に提案し、復興を成し遂げる」ことを目標に設立した組織です(平成25年12月1日〜平成26



小国地区復興プラン提案委員会の全体会

年3月31日)。約400世帯から、地区選出・団体選出(小学校PTA会長・住民組織代表・農業関係機関役員など)として選ばれた委員32名が、①農業振興、②生活環境、③福祉・健康の3つの分科会に分かれて復興プランを検討しています。本担当は①②の顧問を務め、復興プラン検討の土台となる基礎データ(住民意識アンケート、各種放射線量測定など)の集計・分析と、専門的知見からのアドバイスを行っています。平成26年10月には、伊達市長に「小国地区復興についての住民要望書中間」を提出し、行政に住民の意向を伝えました。

居住制限地域である飯館村大久保・外内地区では、行政区(約60世帯)の復興計画の具体化・実施に向けた支援を行っています。その一つが、避難中の住民が「自分や家族のために測定」する放射性物質濃度分布マップ作成のサポートです。住宅・農地(表土剥ぎ取り)の除染が開始される前に、第1回目(平成26年5月11日)の空間線量・農地放射性物質含有量の測定を実施しました。除染完了後には、第2回(9月14日)、第3回(平成27年4月予定)を行います。農地除染が完了した平成27年1月からは、福島県営農再開支援事業などを利用し、新潟大学と連携しながら農地保全・営農再開に向けたサポートを継続する予定です。



住民主体の土壌放射線量測定

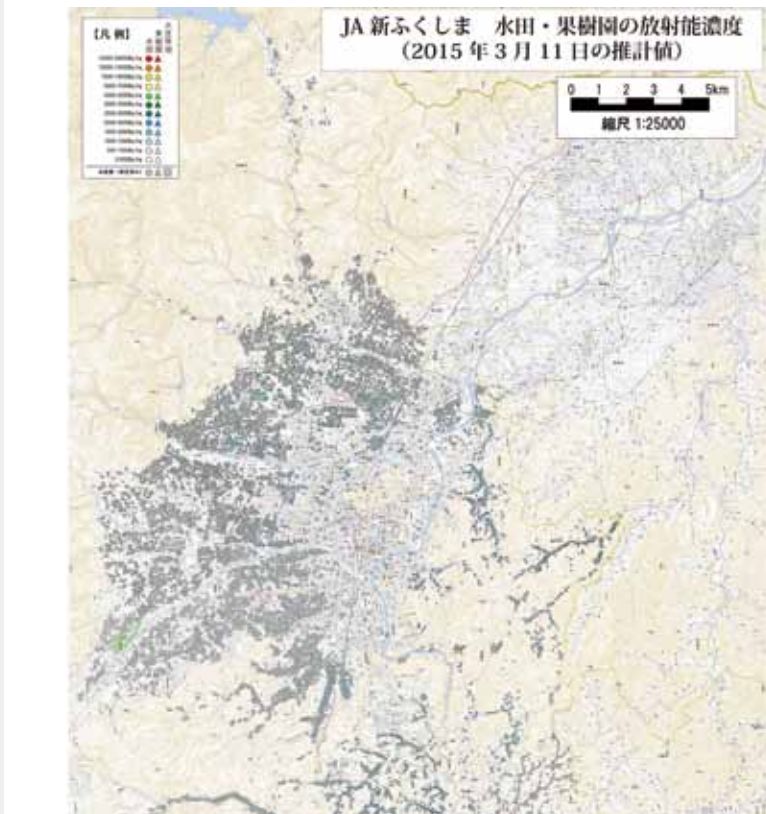
避難地域の農地保全・
営農再開に向けた支援

土壌スクリーニング・
プロジェクト

このプロジェクトは、福島大学の研究者、農協(JA新ふくしま)スタッフ、消費者団体からのボランティアスタッフ(地産地消ふくしまネット・日本生活協同組合連合会等が派遣)が連携し、協同組合間連携により、JA新ふくしまが記録している全水田・全果樹園の放射能計測をする画期的な取り組みです。計測は平成24年5月から始まり、平成26年12月にはJA

新ふくしまが管理する全水田・全果樹園の放射能計測が完了しました(水田24,480筆・63,677地点/果樹園10,058筆・27,308地点/大豆畑・除染畑566筆・1,465地点)。平成27年3月には、地権者説明会とデータ返却を実施します。

「土壌スクリーニング・プロジェクト」による福島市内の放射性物質分布マップ



放射能汚染対策担当

復興の担い手育成事業
「放射線能測定のスキルアップ」
研修会

市民を対象に、放射能の正しい
知識と測定方法を学んでもらう

農・環境復興支援部門の放射能
汚染対策担当では、福島第一原発



研修は講義と実習が含まれています。写真はこれから講義を始める河津賢澄特任教授

事故によって生じた生活環境や農林生態系などの放射能汚染の実態を把握し、その影響を低減化することや生活における人々の不安を少しでも取り除くことを目的としてさまざまな活動を行っています。その一つに「放射線および放射線計測に関する知識の普及」活動があります。これ

は、市民の皆さんに放射線や放射能およびそれらのリスクに関する正しい知識を広め、復興の現場で放射線や放射能の測定に従事している方には正しい計測方法を知っていただくことを行っているものです。その一環として、文部科学省補助金による復興の担い手育成事業「放射線(能)測定のスキルアップ」研修会を毎年行っています。

「放射線(能)測定のスキルアップ」研修会は、平成24年度からスタートしました。福島県内では以前から、食品中の放射性セシウムを検査するために各自治体や学校給食センターをはじめとして、大手スーパーや市民団体など様々な事業所に放射能測定器が設置され、放射能の測定が行われるようになっていました。しかしながら、現場で測定を担当する方の多くはそれまで放射能測定の経験がなく、装置に触れるのも初めてという方が大半でした。そこで、放射線や放射能の測定に従事される方に測定器の原理や定量過程を理解した上で、正しい測定方法を学んでいただくとう始めたのがこの研修会です。

平成24年度と平成25年度には2日間の日程で測定の原理や濃度計算過程を中心とした、かなり高度な内容の研修会を全5回実施しました。各回とも定員を上回るほどの参加申し込みがあ



Na I (TI) 検出器を用いた放射能測定の実習

り、総勢105名の方が参加しました。研修会後のアンケートでも「勉強になった」「非常に役に立った」など概ね好評な感想をいただきました。しかしながら、「内容が難しすぎる」といった感想や「業務があるので1日にしてほしい」というご意見もありました。そこで、平成26年度では、日程を1日とし、初心者の方や測定に従事していない一般の方でも解りやすい内容に変更して、2回の研修会を実施しました。その結果、総勢で37名と多数の参加があり、研修会後のアンケートでも高い評価をいただくことができました。また、参加者からは測定にとどまらず放射線や放射能について日ごろ疑問に思っていることなどの活発な質問があり、放射線に関する理解を深めるお役に立てたものと思っています。

様々な活動を通し、
復興に取り組む

放射能汚染対策担当では、他にも農林生態系内における放射性セシウムの動態および農作物への移行に関する調査研究、大気中放射性セシウムのモニタリング、福島県大熊町における地下水の調査活動、放射性セシウム動態の把握と動態モデルの開発、福島県産農畜産物の放射能調査、放射線観測システム・除染技術の開発協力など様々な活動を行っています。今後もこれらの活動を通して被災地の復興のため尽力していきたいと考えています。



放射能源からの距離と放射線との関係をサーベイメータで測定してみる実習



ワークショップを通しての聞き取り調査(製作した鍋敷物を手に)

商店等に対する聞き取り調査

震災以前から村民が買い物をする場所として富岡町や大熊町、いわき市など浜通りへの依存度が高かったため、事故による馴染み客の離村や仕入れ先の変更など村内の商店は厳しい状況にあります。

サテライトでは、村内の約20の商店・事業所を対象に、震災後の事業継続にあたりどのような困難があったかや様々な変化にどのように対応してきたか、またコミュニティ再生や村の活性化には何が必要かなどの調査を行っています。

[後列左から] 坪井真喜(契約職員)、鈴木敬子(契約職員)
[前列左から] 西川珠美(契約職員)、仲井康通(特任教授)、若月美香(契約職員)

仮設住宅等の訪問調査

平成26年12月現在、川内村の人口2738人の中の42.5%にあたる1165人が村外で避難生活を送っています。今回の調査では、郡山市仮設住宅を戸別訪問し、仮設での生活や家族についての悩み、帰村についての思いなどを聞くとともに、現在の生活状況や支援ニーズを把握し、必要に応じて役場への橋渡しを行っています。

放射線量の経時変化調査

川内村では宅地除染がすべて終了していますが、住民の一部には、再浮遊や表土の移動によって再汚染されるのではないかと不安が残っています。そこで、宅地除染後の家屋周辺の空間線量率を定期的に測定し、除染後の放射線量の変化について調査しています。

放射線リスクコミュニケーション

地域住民とのコミュニケーションを通して、放射線に対する様々な疑問や質問にお答えしています。また、必要に応じてアンケート調査を行い、住民の求めている情報を把握するとともに、専門の講師を招聘し住民を対象とした放射線セミナー等を開催しています。



川内村復興祭

住民との交流

復興祭をはじめとする村のイベントに参加し、住民の方々との交流を深めています。また、帰村されている家庭を訪問し、生活や家族のことなどで困っていること、帰村についての思いなどをお聞きするとともに、必要に応じて役場への橋渡しを行っています。

他大学との連携

村内にサテライトを設置している長崎大学(住民健康サポート)をはじめ、京都大学(内部・外部被ばく調査)、電気通信大学(放射線計測)等の活動と連携し、これらの大学と一体となって村の復興を支援しています。

双葉地方八町村自治体 若手職員研修会の開催



東日本大震災及び福島第一原発事故災害からの双葉地方の復旧・復興に向け、平成24年1月17日に「国立大学法人福島大学と双葉地方八町村との連携協力協定書」を締結して以降、多様な支援活動に取り組んできました。震災から3年6カ月が経過し、目の前の復興がある程度進んできた一方で、復興に関係する者にとつては、自らも被災者でありながら、被災者支援業務対応による慢性的な疲労や中長期的なビジョンの不明瞭さが心身両面におけ

復興庁「新しい東北官民連携 推進協議会会員交流会」

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北3県(岩手県、宮城県、福島県)の復旧・復興をオールジャ



る負担になってきている現状から、うつくしまふくしま未来支援センターでは、「双葉地方八町村自治体若手職員研修会」を10月、11月、2月の3回シリーズで開催しました。

双葉地方8町村の重要な担い手たる自治体職員同士のつながりづくりと価値観を共有した未来像の構築に向けた一歩を促す機会となりました。この研修会は、次年度も開催することにして

企画・コーディネート担当

震災・原発事故により未曾有の被害を受けた福島県の復興・復興を支援する未来支援センターの窓口・調整担当として、情報収集、産学官の連携、情報発信、講演会の開催等の活動を行うことにより、センター業務を側面からサポートしています。2人のコーディネーターを中心に、被災自治体が抱える要望の把握、うつくしまふくしま未来支援センターをはじめとして福島大学が有する人的・知的資源とのコーディネート、企業等との連携・協力体制の構築、これらの取り組みの国内外への情報発信などを行っています。

また、震災・原発事故により大きな被害を受けた相双地域の復興、住民の帰還を支援する拠点として、南相馬市と川内村に支援サテライトを設置し、被災地域に密着した支援活動を行っています。

支援活動の取り組みなど、積極的に情報を発信していきます。



センター棟2階にある展示ホールは、震災後の取り組みや避難所の実情、そして収集・整理・保存した資料について情報を発信し、東日本大震災について多くの人に知ってもらうため、また震災の記憶を風化させることなく継承するため設けています。東日本大震災後のFUREの復興支援活動パネルのほか、福島大学が設置した避難所の記録、双葉八町村の復興計画、震災や放射能関係の書籍・報告書等を展示しています。開場以来、外部からの訪問者や学生たちに幅広く活用されています。なお新しい書籍の案内、展示内容の変更などはFUREのホームページから確認できます。

東日本大震災記録資料 「展示ホール」



ふくしまスマートシティ・プロジェクトの活動概要

1. 知見の実装化による復興・再生に向けて

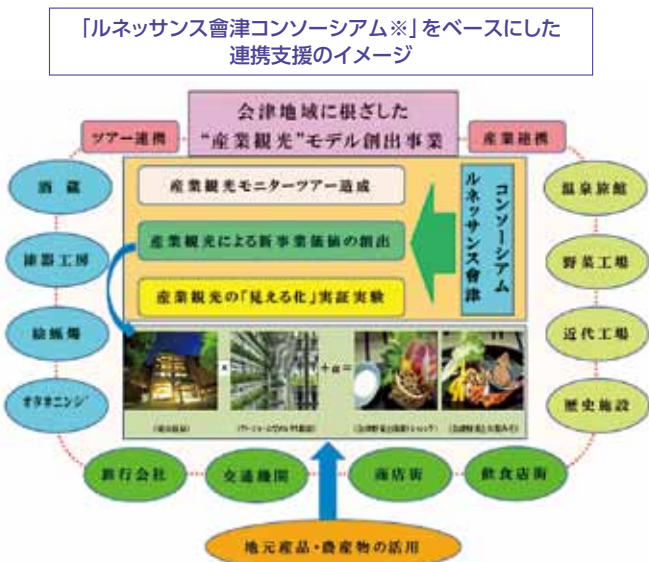
- (1) 21世紀初頭に誕生し、主として都市問題やエネルギー問題の解決などで注目を集めることが多い“スマートシティ”ですが、一方でその先進性から、低迷する地域経済の活性化や震災からの復興・再生に活かすことが求められています。
- (2) 当プロジェクトでは、“スマートシティ”、“スマートコミュニティ”に関する視察・研究等を重ね、その過程で得られた成果や学内等における知見を実装化し、ふくしまの復興・再生に結びつけるべく、産学官連携をベースに、県内各地域・自治体・業界等からの要請に対し支援活動を行っています。

2. 国内におけるスマートシティ活動の視察・情報交換（事例紹介）

- (1) 富山県富山市では、人口減少や少子高齢化問題、あるいは域内産業経済の衰退といった地方都市が抱える問題に対して、LRTを中心とする公共交通機関の整備・利活用などを柱とした“コンパクトシティ戦略”の推進により解決・克服すべく、地元産業界や地域住民と連携し取り組んでいます。当プロジェクトでは、現地を視察し、同戦略を行政の立場でリードする富山市担当部局や、ICT分野で全国展開している地元企業などと情報交換を行い、また連携関係の構築に努めています。
- (2) 千葉県柏市では、つくばエクスプレス沿線の柏の葉キャンパス駅周辺の広大なエリア（500ha）開発に当たり、「環境共生都市」、「健康長寿都市」、「新産業創造都市」といった未来志向の都市づくりを目指し、“柏の葉スマートシティ・プロジェクト”を軸として取り組みを進めています。その中で、同地域のまちづくりの推進主体として活動している柏の葉アーバンデザインセンターとの間で、まちづくりの進め方に関する調整や合意形成について情報交換などを行いました。また、地域内のエネルギーマネジメントの中核を担っている日立製作所の管理センターの視察や担当責任者との間で、情報・意見交換を行いました。

3. 福島県内における具体的な活動について

- (1) 新しい産業観光の創出に向けたモニターツアーの実施
会津地域を舞台に、地場産業や伝統産業にかかる企業の現場と誘致企業の近代工場などでツアーを実施することで、従来にはなかった視点で観光的な魅力をアピールし、同時に関わる地域や企業、人々に潤いをもたらすことができるように、連携関係構築の支援を行っています（下記イメージ図参照）。



※ルネッサンス会津コンソーシアムとは、往時の会津の繁栄を取り戻すべく、福島大学、富士通、東邦銀行、地元温泉旅館、酒造・漆器・絵紙産業界、交通機関、旅行会社、政策投資銀行などで構成された、会津地域の復興・再生を支援する組織です。

- (2) スマートシティ普及のための広報活動
“スマートシティ”の考え方をベースとしてこうした取り組みを普及していくための講演等の広報活動の実施にも積極的に取り組んでいます。

科学研究費補助金基盤研究（S）『東日本大震災を契機とした震災復興学の確立』

科学研究費補助金基盤研究（S）は平成25年度に採択され、2年度目が終了しました。本プロジェクトの活動目的は「支援知」を研究に生かし、震災復興学を通じて世界の平和と未来の地球に貢献することにあります。研究初年度は、主に、日本や世界の地震・津波・原子力事故による災害現場を広く視察し、その災害の実態と復興に関する「支援知」を収集しました。本年度はそこから得られた知見を活かしつつ、各分野の研究を深めた上で、下記のようなアウトリーチにも力を入れました。

本プロジェクトの成果が新たな防災の枠組みに対する提言となり世界各国に貢献するものになり得るよう、次年度も邁進してまいります。

【主な活動】

- ・定例研究会：全9回の定例研究会を実施し、震災復興学の確立に向けての枠組みを議論しました。
- ・公開研究会：全4回の公開研究会を開催。「震災復興学の確立」に向けての研究発表等を行いました。
- ・復興支援に関する提言：日本学術会議東日本大震災復興支援委員会福島復興支援分科会から提言を行いました。（2014年9月30日）
- ・国際シンポジウム：「Building back from Cascading Disasters and Establishment of academic framework of Disaster Reconstruction」をテーマに、国際シンポジウムを開催しました。（2015年3月）
- ・英文出版の準備：2014年4月にフロリダ州タンパ市で開催されたアメリカ地理学会の福島セッションにおいて当メンバーが研究報告や議論で中心的な役割を演じました。これをきっかけに英文出版が進んでいます。
- ・ウェブサイト開設・公開：当プロジェクトの成果・シンポジウムや研究会等の情報を速やかに国内外に発信するため、ウェブサイトを公開しました。（HP <http://bbb-fukushima.org/>）



HP 東日本大震災を契機とした震災復興学の確立

「フレフレ！はつたび！！」プロジェクト

～福島発見・福島からの発信・福島への初めての旅～

■「フレフレ！！はつたび！！観光パンフレット」とは？

震災以降、原発事故の影響もあり、今の福島への教育旅行は低迷しています。そこで、『福島の熱意や想いをそのまま伝えたい！』。そんな気持ちを持った学生7人で観光パンフレットを作ることになりました。このパンフレットは、うつくしまふくしま未来支援センターのマスコットキャラクター「めばえちゃん」がナビゲーターとなって、福島の魅力を紹介する構成になっています。旅行者が繰り返し福島の旅行を楽しめるように、「めばえちゃんシール」を作成、観光マップに自由に貼ってもらえる工夫をしました。



■初めてのことばかり…、慣れないながらも福島の明るさを伝えたい！

パンフレットの制作は、どれも慣れないことばかり。企画内容が決まらず、複数の学類・学年にまたがるライフサイクルの違いなどによる意志疎通の難しさはありましたが、みんなで協力して困難を乗り越えました。

今回の取材では、農業を営んでいる方や、伝統工芸に携わっている方のお話を聞き、胸が熱くなりました。私たちが感じ取った福島の魅力、住む人の思いをたくさんの人に知ってほしいと思っています。前向きに明るい福島を伝えたいという気持ちが詰まった一冊をぜひご覧ください。

（プロジェクト学生代表／斎藤 倫明）

（プロジェクト指導 FURE's 担当／富永 祐子）



FURE's facebook <https://www.facebook.com/fures1>

福島大学 ふくしま食と農の情報発信プロジェクトチーム

おかわり農園プロジェクト ～学生が創る福島のこめみらい～

■「おかわり農園」に込めた思い

おかわり農園では、地元の学生がゼロから農業に挑戦しています。お米はどのように作られているのか、安全でおいしいお米ができるにはどのような対策が行われているのかを学生が体験しながら学んでいます。私たちが学んだこと、感じたことは、学生の言葉でSNSやブログで発信しています。今後は、私たち学生がより生産者に近い立場になって、農業生産法人アグリ農産やJA、福島県農業総合センターなどの協力をいただきながら検査体制なども学び、情報を発信していきたいと考えています。



■「おかわり農園」で魅力発信を

学生はほぼ全員が農業初挑戦ということで、何をすればいいのかわからないまま「おかわり農園」はスタートしました。福島の魅力を県内外の人にどのように伝えればいいのか、どんな情報を発信すればいいのか日々悩みながら活動しています。学生だからこそできる情報発信を心がけ、消費者が抱える福島県産品に対する不安を解消していきたいです。私たちが作ったおいしいお米をたくさんの消費者に手にとっていただき、福島のおいしさ・魅力をもう一度知っていただきたいと願っています。

（プロジェクト学生代表／小畑 裕平）

おかわり農園ブログ <http://koyamazemi2014.blogspot.jp>

学生サポーター組織
FURE's

FURE'sとは

「福島の復旧・復興に役に立ちたい」「福島の現状を学び将来に生かしたい」。そのような志の学生が登録をし、FUREのセンター教職員の指導の下、実践的な支援、シンポジウムへの参加、自主事業企画などを行っています。





うつくしまふくしま
未来支援センター
フロアガイド

	503 双葉郡地域再生プロジェクト／共同スペース 502 スマートシティプロジェクト室 501 地域復興支援部門	5F リフレッシュルーム 各階毎に趣きの異なるリフレッシュルームがあり、打ち合わせやイベント等で利用しています。
	406 同窓会事業等プロジェクト室 405 中会議室 404 教育相談室 403 若者キャリア支援担当 402 こども支援担当 401 企画・コーディネート担当	4F 教育相談室 子どもに関わる想いや悩みを共有し、お手伝いさせていただく場「ほっとルーム」を開設しています。
	304 農・環境復興支援部門 教育実験室 303 科研費基盤Sプロジェクト室 302 学生サポーター室 301 農・環境復興支援部門	3F 301 研究室 棟内の各部屋は担当毎の相部屋となっており、職員同士の関係を行いやすい環境が整っています。
	206 資料保管室 205 展示準備室 204 小会議室 203 大会議室 202 センター長室 201 事務室	2F 大会議室 センター最大の会議室で約50名収容できます。センター員会議や講習会等で使用しています。 展示ホール ビデオライブラリーや記録写真等の展示を通じて震災後の福島大学の取り組みをご紹介します。
	105 土壌実験室 104 試料保管室 103 放射線分析装置室 102 放射線分析準備室 101 化学実験室	1F 放射線分析装置室 食品放射能測定システム等を用いて、農業を中心とする産業復興や安全な学校生活等の社会的基盤の確立による市民生活の復興のために、計測による一次情報の把握を行っています。

うつくしまふくしま未来支援センター員一覧			
平成 27 年 3 月 1 日現在			
所 属		氏 名	
センター長		学長特別補佐・人間発達文化学類教授	兼務 中 田 ス ウ ラ
副センター長(事業推進担当)兼務食・農復興支援担当マネージャー		経済経営学類教授	兼務 小 山 良 太
副センター長(管理・広報担当)兼務事務室長		副参事	専任 山 崎 裕
センター長アドバイザー		客員(特命)教授(帝京大学教授)	兼務 山 川 充 夫
センター長アドバイザー		客員教授(学習院大学教授)	兼務 村 松 康 行
センター長アドバイザー		客員教授(日本大学准教授)	兼務 野 口 邦 和
企画コーディネート担当	企画・コーディネート担当マネージャー	行政政策学類教授	兼務 塩 谷 弘 康
	企画・コーディネート担当(自治体コーディネーター)兼務いわき・双葉地域支援サテライト長	特任教授	専任 仲 井 康 通
	企画・コーディネート担当(事業コーディネーター)	嘱託職員	専任 千 明 精 一
	企画・コーディネート担当(震災アーカイブ)	契約職員	専任 若 月 美 香
	企画・コーディネート担当(学生サポーター組織FURE's他担当)	契約職員	専任 富 永 祐 子
	企画・コーディネート担当	契約職員	専任 嶋 原 あ ゆ み
こども・若者支援部門	部門長兼務こども支援担当マネージャー	人間発達文化学類特任教授	兼務 森 知 高
	こども支援担当(教育カウンセラー)	特任教授	専任 本 多 環
	こども支援担当	人間発達文化学類准教授	兼務 安 田 俊 広
	こども支援担当(こども支援コーディネーター)	特任研究員	専任 浅 井 継 悟
	こども支援担当(大熊町教育委員会支援)	客員研究員	兼務 鈴 木 裕 子
	若者キャリア支援担当マネージャー	総合教育研究センター教授	兼務 五 十 嵐 敦
地域復興支援部門	若者キャリア支援担当(キャリア形成)	特任助教	専任 今 泉 理 絵
	部門長	人間発達文化学類教授	兼務 初 澤 敏 生
	地域復興支援担当マネージャー	行政政策学類准教授	兼務 丹 波 史 紀
	地域復興支援担当(被災者支援)	特任准教授	専任 天 野 和 彦
	地域復興支援担当(コミュニティ再生)	特任准教授	専任 佐 藤 彰 彦
	地域復興支援担当(ボランティア育成)	行政政策学類教授	兼務 鈴 木 典 夫
	地域復興支援担当(地域社会と市民生活分野)	特任研究員	専任 開 沼 博
	地域復興支援担当(はじめてっぺ事務局)	特任専門員	専任 小 笠 原 隼 人
	地域復興支援担当(地域社会と市民生活分野)	客員研究員	兼務 伊 達 洋 駆
	地域復興支援担当	契約職員	専任 藤 倉 庸 子
	歴史資料保全担当マネージャー	行政政策学類教授	兼務 菊 地 芳 朗
	産業・街づくり支援担当マネージャー(観光経済学)	特任准教授	専任 高 木 亨
	産業・街づくり支援担当(交通経済)	経済経営学類准教授	兼務 吉 田 樹
	産業・街づくり支援担当(街づくり)	特任研究員	専任 間 野 博
	産業・街づくり支援担当(再生可能エネルギー分野)	共生システム理工学類教授	兼務 佐 藤 理 夫
	産業・街づくり支援担当(再生可能エネルギー分野)	特任研究員	専任 大 平 佳 男
	産業・街づくり支援担当	客員研究員	兼務 斎 藤 喜 章
	産業・街づくり支援担当(南相馬市内一時帰宅支援)	契約職員	専任 須 江 浩 子
	産業・街づくり支援担当(スマートシティプロジェクト)	客員教授(東邦銀行派遣)	兼務 渡 辺 正 彦
	産業・街づくり支援担当(スマートシティプロジェクト)	連携研究員(東邦銀行派遣)	兼務 星 効
	防災支援担当マネージャー(防災教育・国際発信・科研費S担当)	客員(特命)教授(JICA派遣)	兼務 三 村 悟
	防災支援担当(断層調査・防災教育)	人間発達文化学類准教授	兼務 中 村 洋 介
	防災支援担当(地理学・科研費S担当)	特任研究員	専任 瀬 戸 真 之
農・環境復興支援部門	部門長	環境放射能研究所教授	兼務 塚 田 祥 文
	食・農復興支援担当(農業復興支援コーディネーター)	特任教授	専任 野 川 憲 夫
	食・農復興支援担当(造園学・地域経済学)	特任准教授	専任 石 井 秀 樹
	食・農復興支援担当(農業経済学)	特任准教授	専任 小 松 知 未
	食・農復興支援担当(試験作付補助等)	特任研究員	専任 朴 相 賢
	食・農復興支援担当	客員研究員	兼務 平 井 有 太
	放射能汚染対策担当マネージャー	共生システム理工学類特任教授	兼務 河 津 賢 澄
	放射能汚染対策担当(兼務南相馬地域支援サテライト長)	共生システム理工学類教授	兼務 山 口 克 彦
	放射能汚染対策担当(放射線防御)	特任准教授	専任 大 瀬 健 嗣
	放射能汚染対策担当(放射線動態解析)	特任研究員	専任 北 山 響
	放射能対策担当(地質調査・防災教育・放射能教育)	特任研究員	専任 島 長 義
	放射能汚染対策担当(放射線計測)	契約職員	専任 鈴 木 千 佳
	放射能汚染対策担当(環境放射線)	契約職員	専任 菅 野 章
	放射能汚染対策担当(環境放射線)	契約職員	専任 加 藤 美 紀
		契約職員	専任 西 川 珠 美
	いわき・双葉地域支援サテライト	契約職員	専任 鈴 木 敬 子
科学研究費補助金S 基盤研究チーム		契約職員	専任 坪 井 真 喜
		特任研究員	専任 堀 川 直 子
		契約職員	専任 安 齋 祥
事務室		契約職員	専任 菅 野 小 緒 里
		主事	専任 武 山 智 治
		契約職員	専任 佐 藤 純 子
		契約職員	専任 黒 澤 歩 美
		契約職員	専任 高 野 美 喜

センターマスコットキャラクター「めばえちゃん」のご紹介



『めばえちゃんとは?』

うつくしまふくしま未来支援センターでは、こども支援担当を中心に「郷土に想いをよせる同窓会事業」を実施しています。

平成 23 年 3 月 11 日に発生した地震・津波、そして原発事故に伴い、被災地域の多くのこどもや保護者が県内外へ避難しました。こどもたちにとって、クラスの友だちと一緒に遊んだり、地域のお祭りに参加したり、お気に入りの場所で遊んだり、そうした何気ない当たり前の生活が「夢」として語られる現状があります。

「郷土に想いをよせる同窓会」は、当時のクラスメイトにもう一度集まってもらい、交友を深めたり、友達どうして郷土の伝統に触れるプログラムの体験をすることで、郷土の良さを再確認し、新たな環境でそれぞれが前に進むためのエネルギーを高めてもらうことを目的として実施しています。

ただ、長くて1泊2日のプログラムは、すぐにみんながそれぞれの場所に帰ってしまいます。何か、「今日という日」を忘れないためのキーワードをつくりたい。そんな想いが学生の力で形となり、誕生したのが「めばえちゃん」です。「めばえちゃん」には、今日のことを忘れないでいようね、というみんなのメッセージが込められています。

※郷土に想いをよせる同窓会事業は文部科学省委託事業「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の採択事業です。

めばえちゃんの活動内容

『同窓会事業や地域交流事業への参加』

- ・郷土に想いをよせる同窓会のほか、
- ・幼稚園運動会
- ・サイエンス屋台村
- ・オープンキャンパスなどでのセンター広報活動を行っています。



『来館者対応』

- ・うつくしまふくしま未来支援センターの見学に来てくれた小中高生たちとの交流



TOPICS

京都開催シンポジウム「ほんとの空が戻る日まで—東日本大震災及び原発事故からの福島の間い—」開催



平成 27 年 3 月 8 日立命館大学朱雀キャンパスにおいて、シンポジウム「ほんとの空が戻る日まで—東日本大震災及び原発事故からの福島の間い—」を開催しました。震災直後に送られた関西から被災地への様々な支援に対して、震災後の福島の経験を通して東北・福島の想いを関西へつなぎ、あらたに起こりうる災害への減災意識の啓発を図ることを目的に、立命館大学・大阪大学の共催のもと実施されました。当日は約 320 人の参加があり、福島の現状報告やパネルディスカッションを通して、福島への理解を深めていただきました。



元NHKアナウンサー NPO 法人「8bitNews」代表 堀 潤 氏による基調講演「誰もが発信できる時代 福島の今を丁寧に世界に伝えるために」



福島の現状報告「福島大学の活動状況」



福島の現状報告「こども支援を通して見えてきたこと」



「震災・原発事故からの福島の間い」

今後も、うつくしまふくしま未来支援センターでは、地震、津波、福島第一原発事故、風評、風化（ふたつの風）の複合災害で苦しむ福島県の実況を全国へ伝える活動『シンポジウム「ほんとの空が戻る日まで」』を全国各地で継続実施いたします。



パネル展示の様子

題字：「共に生きる」の書が福島大学へ

「愛にはじまる」や「天使の正体」の著者として知られ、ダウン症の書家である金澤翔子さんが福島県の被災地の方々への一助にしたいと筆をとった「共に生きる」の書が、縁あって福島大学に寄贈されました。

復興に懸ける福島県民をはじめ大学関係者への励ましやエールになればという思いを込めて揮毫していただいた作品です。「みんなと一緒に頑張れるように」との翔子さんの意向が込められています。多くの方々に見てもらえるよう、共通講義棟（S棟）の入口に掲出させていただきました。

「いつもみなさんのことを思っています。」

書によせて —金澤 翔子・泰子—

2011年3月の震災直後、まだ余震が続く不安な毎日の中で、テレビのニュースに、冷たい雪がしんと降り積もる被災地が映し出されていました。翔子はそれを見て「地震を止めて!」「雪を止めて!」とお願いの電話をかけようと思いました…どこにかけるとも、わからないのに。そして、「私が助けてあげるから!」とテレビに映るその場所へ本気で出かけようと思いました…どこに行けばいいかも、わからないのに。ただ、ひたすらに、まっすぐに、被災地の皆さんのことを思っていました。

すぐに側には行けないけれど、せめて想いだけでも、寄り添っていることを伝えたい…。そんな気持ちを込めて書き上げたのが「共に生きる」です。翔子や私たちの想いが、少しでも皆さまに届くことを祈っています。

FURE

うつくしまふくしま未来支援センター

Fukushima Future Center
for Regional Revitalization

国立大学法人
福島大学
Fukushima University

文部科学省大学改革推進等補助金
(大学等における地域復興のための
センターの機能整備事業)
(平成23年度選定)

うつくしまふくしま未来支援センター

ホームページ <http://fure.net.fukushima-u.ac.jp/>

お問合せ先

〒960-1296 福島市金谷川1番地
TEL.024-504-2865 FAX.024-504-2865

メールアドレス fure@adb.fukushima-u.ac.jp

FURE

検索

福島大学

ホームページ <http://www.fukushima-u.ac.jp/>

お問合せ先

福島大学 総務課(広報担当)

〒960-1296 福島市金谷川1番地
TEL.024-548-5190 FAX.024-548-3180

メールアドレス kouho@adb.fukushima-u.ac.jp

福島大学

検索

写真/相馬野馬追(南相馬市)